

実践④ 鹿児島県立垂水高等学校

1 はじめに

本校は大正14年に創立され、令和7年に創立100周年を迎える。現在は普通科3学級、生活デザイン科3学級で少人数ながらも、「一人ひとりを大切にし、その可能性を伸ばす」ことをモットーとし、自ら考え、様々な経験を重ねることで自分に自信をつける教育活動を展開している。

図書館は特別教室棟3階にあり、教室棟とは離れているが、生徒の気持ちを図書館へ向かわせる仕掛け作りに逆に意欲を高められる。令和5年度の一人あたりの平均貸出冊数は、15.2冊である。



2 図書委員会の組織

生徒図書委員会は任期1年、各クラス2人の合計12人で構成される。前後期の専門委員会はもちろん、イベントの前後に話合いの場を設けており、全ての活動を分担して行っているため、学年を問わず積極的な交流がある。

3 特色ある取組

(1) 校内ビブリオバトル大会（令和3年度からスタート）

- ・ 9月末のLHRで、クラスごとに開催
- ・ 10月の文化祭で、代表バトラーによる開催

人前で話すことへのチャレンジだけでなく、自分の気持ちをことばで表現することを苦手とする本校生徒の刺激になることを願い、企画・運営している。

クラスの実態に応じて、発表の形態を柔軟に変えている。実施方法の検討や当日の司会・進行は全てクラスの図書委員が行うことで、担任・副担任も生徒と一緒にバトルに参加し、思いや体験を共有することができる。



(2) 読書週間

- ・ 5月、10月の年2回設定
- ・ 図書委員の趣向を凝らした内容

読書担当者は読書週間に合わせて集団読書を設定しているが、生徒図書委員も各回イベントを企画している。これまで校舎を利用したクイズスタンプラリーや部活動ブックトークなど、景品作りも含めてアイデアを出し合い、開催してきた。生徒だけでアイデアが出ないときのために、司書や読書指導係が研修で学んだことや他団体の実践を本校なりにアレンジし、提案することもある。



(3) 授業連携

- ・「総合的な探究の時間」オリエンテーション
- ・中学生体験授業

専門科目の授業時に、生徒たちが参考図書を借りに来るのはもちろん、図書館司書が実際に授業を実施する時間を設けている。著作権に関することやポップ作成のコツなど、司書ならではの視点の授業は教員側も新しい気付きを持てる。



(4) 小学校での読み聞かせ

- ・紙芝居、パネルシアター、ブックトークなど

生活デザイン科で保育を学んだ生徒たちによる活動である。保育分野のPDCAサイクルに該当し、生徒の学びを深めたり、自信につながったりする。



(5) 部活動連携

- ・吹奏楽部との合同クリスマス会開催

12月の終業式後に、図書委員と吹奏楽部がそれぞれアイデアを練った出し物を考え、感性の融合を楽しんでもらう場を設定している。学校図書館長（校長）による読み聞かせや職員の楽器演奏などの仕掛けも、参加者に好評である。



4 今後の課題

読書離れのみならず、図書購入費の削減など学校図書館を取り巻く環境は年々厳しくなっている。一人一台タブレットがある学校現場で、どうすれば図書館へ来てもらえるか、いかに本に触れてもらえるかが大変大きな問題で悩ましい限りである。

生徒や教職員の「読んでみようかな」という心をくすぐるために、あの手この手で仕掛けを作っていく必要があるが、その情報収集やアイデア浮揚のためにも、実践的・効果的な研修会の頻度の高い開催や、学校図書館司書が参加しやすい環境作りが進むことを願ってやまない。

5 おわりに

「なぜ読書が大切なのか」その哲学的問いへのぶれない心こそが、読書指導をする上で欠かせない。「その気持ちの機微はあの本の……」「そういえば今読んでいる本の人物は……」ふとした瞬間の知的な会話や空気感は、生徒のみならず教職員の人格形成、人間性の発達のコアをくすぐる。体感しなければ分からないことだからこそ、遊び心を大事にしながら、良い意味での波紋を広げなければならないのではないかな。

余談ではあるが、令和7年3月卒業予定の3年生から、読書への意欲だけでなく、読書を介しての洞察力や分析力の体得に高い関心を抱き、図書館司書を目指し進学する生徒が2人輩出されたことを付け加えておく。